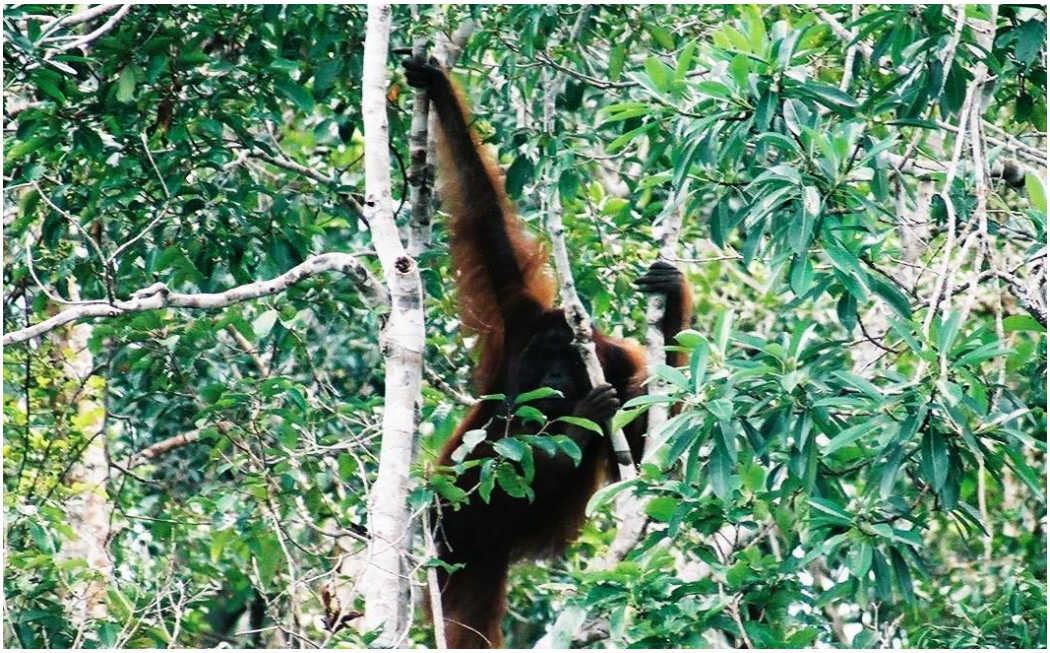
Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

117

森　の　通　信　　2015. 6. 9



違法伐採停止で野生のオランウータン叫ぶ

タンジュン・プテイン国立公園のスンガイ・ブル・クチルで（2007 年 7 月）撮影西岡

CONTENTS

・People(36) ＪＡＴＡＮ原田さん・・・・・・・・p3
・タンジュンプティン調査報告・・・・・・・・p4～p8
・パーム油学習会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p9
・グヌン・パルン国立公園報告・・・・・・p10～p12
・オランウータンの生態と保全4・・・p13～p15
・リニア学習会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p16
・世界の森林ニュースより・・・・・・・・・・・・・・p17
・会計より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p19

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
117
2015.6.9

アブラヤシ事業権、環境アセス同意以前に、森林伐採・開発は許されるのか？？！！

とんでもないことだ！RSPO に再度の申し入れ文を 2014 年末に私たちが出した。PT.AMSR 親会社の PT.BGA 社は、今 2015 年の１－３月までの調査で植林実施を始め(だが伐採地の1%未満の再植林計画しかない)、またオランウータンの調査をした(実際破壊された森からオランウータンがどうなったかの回答でない)と報告を RSPO に示した。ええっ、それだけで回答というのか？！

RSPO は、「昨年 11 月の RSPO 会議で JATAN、オランウータン保護センターメンバーに話したことで異議申し立ては済んだ。BGA はまだ調査をしている」という！ BGA/ASMR 社は開発許可前の無許可の伐採であり、誰かが火災も引き起こしていたが、 RSPO は BGA 側のみの意見を聞き、現地調査しない対応で終了するつもりか！今後、期待出来ない存在なのか!!？

タンジュン・プテイン国立公園周辺の開発許可について、PT.ASMR 社は 2012 年 11 月 6 日に Kotawaringin Barat の首長(Bupati)に立地許可(Izin Lokasi)を提出し、首長は 2012 年 12 月 18日にセコニア村(Desa Sekonyer)、クマイ・セバラン村(Desa Kumai Seberang)、トルク・プライ(Teluk Pulai)村を含む 9276ha の立地許可を発行。2012 年の環境影響評価(AMDAL)の義務に関する規則(Peraturan Menteri Negara Lingkungan hidup)で、2013 年4月から 5 月、コンサル企業 Sonokeling がアセスメントらしいもの(？)を実施。直ぐ 2013 年6月8日には何と Kumai Seberang 地区、7 月にジュルンブン区で伐採し開発を始めた。プランテーション事業法 (Plantation Business Permit/IUP)を得たのは 2013 年 11 月 26 日。事業法許可前の開発で、全く違法伐採・違法開発だ。

2013 年 10 月28日、環境許可(Envionmental Permit/Izin Lingkungan)に首長の同意を得た。立地許可条項8(Point8ketentuan)で「企業が土地に対する事業権を取得するまでは土地を開発してはならない」と記載され、アブラヤシ事業権(Plantation Business Permit)取得前に伐採した。

「伐採したところの地図を示せ！」という指摘も無回答。「Kumai Sebarang-Sekonyer 村は大半が泥炭湿地の可能性があり、ウータン等での泥炭湿地調査 29 箇所の半数以上が3m以深」で、モラトリアムに反すると指摘した。PT.BGA/ASMR は 16 箇所の調査だけ。「せめて 50 箇所調査すべき」との私たちの提案も RSPO は無視。もともと大半が森で、新規開発は不可能なのだ。

RSPO は、違法開発手続きに触れず、「火災は PT.BGA が訓練していた」と。訓練後に火災が発生したのだ。これについて、12 月の私たちの具申・提案にも RSPO はこの5月ふれていない。

また、村人に補償せずに開発をするのは法令「Regulation No26/2007」に違反し、Kumai Seberang や Sekonyer 周辺での伐採、開発は法律違反となる。村人に補償をしたのか？NO だ。また、アブラヤシ開発の小作(プラズマ)について 20%を地元民に渡すことであるが、これも不明確だ。何たる開発！

ASMR/BGA 社は当然動植物調査も杜撰で、ボルネオ鉄木(ウリン)、ボルネオ・シロヒゲ・テナガザルの存在すら報告書に記載していない。このような杜撰すぎるアセスはやり直しが本来であり、RSPO は開発業者の意向を聞くための存在になるか・・!!ITTO も問題国に勧告をしたのだ。（西岡）

【ウータン活動報告】

2015・4・18　ウータン学習会第１回アブラヤシ問題（ゲスト・BCTJ 中西さん）

５・14　神戸国際大学附属高等学校でワークショップ（石崎）

４・29～５・12 中カリマンタンのタンジュンプティン公園へ調査・状況確認等（石崎、近藤）

５・24　環境市民「環境入門講座・野の塾　熱帯林破壊の現場からの報告～」(石崎)

People(36)JATAN{熱帯林行動ネットワーク]原田さんと仲間

＝APP 社などの悪企業の紙を使用しないで!　原生林破壊 No!の政策を＝

3 年前には当時のサラワク首相 Taib に文句を言いに行き、昨年も ITTO で行動

当会の兄貴分の JATAN(熱帯林行動ネットワーク)の代表の原田さん(写真左)と事務局の中司君。1987 年にサラワク州のプナン、ケラビット、カヤン人らの森林破壊を知り、日本で最初の熱帯林保護団体を設立。当初は黒田氏が長年事務局長を勤め、世界に日本の運動団体を宣伝。黒田事務局長からその後、小倉さん、小浜さんが引っ張り現在、原田さんを含め今も活動的だ。スマトラ島の APP 社、APRIL 社の違法な原生林破壊停止を呼びかけ、最近はアスクルの{紛争コピー紙}問題を呼びかける。アスクルが調達する紙の原料は APP 社。APP 社は何度も「森林破壊停止」を表明するが、未実行!「JATAN とウータンは、草の根の国内森林 NGO 界で勢力を二分する両雄といえる存在です。この 10 年くらい、JATAN はどちらかというとインドネシアの紙・パルプ問題に力を注いできて、そういう意味で、ウータンと具体的な接点を強められずにいました。JATAN の原点ともいえるサラワクの熱帯材問題にもフォーカスしたいと思ってます」と原田公(akira)代表。サラワクは未だに原生林を破壊しているから。JATAN 通信 100 号記念、有難う。
今、世界で Zero Deforestation(森林破壊ゼロを)キャンペーンが今年1月から始まった。8 割が森林破壊し、パラグアイ政府も 2018 年から同計画を推進すると。保護計画が始まるか?「ところで原田さん、タバコは・・？」私も止められないんです。Eco じゃないとの声も。(西岡)

(http://www.jatan.org/?p=3229 でアスクル社へのキャンペーンを！)

(zero deforestation 行動は、Google+hutan.nishioka@gmail でも見れます)

タンジュンプティン 2015GW 調査報告（石崎雄一郎、近藤美沙子）

■ローカル NGO の葛藤（石崎）

バスキはこの一週間、FNPF をやめることを考えていたという。「他の村では、賛成派と反対派がわれている。しかし、セコニャール村はいまやほとんどが賛成派だ。FNPF と村人の関係はとても複雑だ。私は恐れている。自分のことではない、FNPF のスタッフ、友人たちのことを考えるとうかつに戦えない。しかし、クブン村では、原生林の森を守るために先住民の仲間が戦っている。友は私に戦うべきだという。外の立場になるというのも一つだ」

2015 年 4 月 30 日、僕と同じ飛行機で、FNPF に新たなボランティアとしてオランダ人女性のヘスターさんがやってきた（同じ飛行機だとわかったのは、僕が FNPF と書いた T シャツを着ていて声をかけられたからである）翌朝、FNPF のスタッフが集まるミーティングでバスキはこういった。「FNPF はスクールである。誰もが誰もから学ぶ。みんなローカルで、学はないが、自然や子どもについて重要なことは知っている。そして、自信を持っている。ここにきてくれて、友達になってくれてうれしい。たくさんの友達がここに来た。みんなクレイジーで怠惰だが、とてもいいやつだ。多くは違法伐採をしたり、鉱山開発をしてきた。あるいは、その息子たちである。それは事実だが、いまでは森を守っている。過去は重要でない。ここには上下関係はない。誰もボスではないし、部下でもない。５年前にイサムは OFUK の森林再生プロジェクトへ引き抜かれそうになった。しかし、小さな子どもがいるにもかかわらず、FNPF に戻ることを選んだ。どんな職業であれ、一度森に入ればみな同じようなゴツゴツの手になる。そして、あなたはたくさんの知識もあるだろうから、ぜひ FNPF の仲間にも教えてほしい」

ウータンが FNPF と協力している背景は、もともと彼らが僕らをドナーや仕事の相手ではなく、ただ友として迎え入れてくれたことだ。はじめの頃は頑としてドネーションを受け取ろうとしなかったバスキの姿が、ありありと思い出される。「君たちは友達だからお金を受け取ろうとは思わない、ここで一緒に活動をする。それは仲間だからで、それで十分だ」

このミーティングでは、大きな進歩が見られた。トラブルメーカーで過去に 3 度 FNPF をクビになったオペックは、自分の仕事である子どもへの環境教育について堂々と報告をしていた。バスキは言う。「次のリーダーとなるアドゥにとって、私の存在は障害となる。はじめは困るかもしれないが、すぐに慣れる。そして彼らは自分たちで成長していくだろう」

■「せまりくるプランテーションの影響～BGA による開発の現状～」（石崎）

クマイセバラン、タンジュンハラパン村の周りは、全て開発されたという。僕が着いた同じ日に、WALHI のアリーさんたちとジャカルタのジャーナリスト数名が村に行ったが、ブロックされて、ロケーションに入ることができなかった・・

数日後、いつでも隠せるように iPhone6 を胸にしのばせ、クマイセバランと村の周りの動画と写真を撮影することができた。クマイセバランは船付き場と各村、プランテーションをつなぐ大通りが一つしかないため、少しでも止まると怪しまれる。ほんの数十秒でしげみの奥へいき、そこで広々と開発された土地に置かれているアブラヤシの苗を確認することができた。タンジュンハラパン村の周りの開発予定地は草原が広がり、一部小さな雑木林のようなものも見える。しかし、ニッパやしの向こう側で明らかに森が無くなった痕跡があるクマイセバランと比べると、森林が開発されたかはわからない。開発予定地の多くは、使われていなかったオープンエ

リアにみえるが、明らかに残った森と近くなり、切迫した状況にも思える。道の途中にはおどろおどろしいシャベルカーが 5 台、今にも動き出そうな様子で待機していた・・（恐らくプランテーションの水路を掘るのだろう）

その予定地をさらに奥へ進み、もともとあった BW 社のプランテーションとの境くらいまでいくと、すでに BGA によって若いアブラヤシの苗が植えられたエリアがある。ここが開発されたところだろうと見受けられるが、もともと森だったのか草原だったのかはわからない。2 日間ここを通ったが、働いている人の姿は見受けられなかった。タンジュンハラパン村では、プランテーション方面に働きに行く人の数が明らかに増えたそうなので何かしらの作業は行っていると思うのだが・・ アリーさんも言っていたが、村の周りの開発状況については、注意深く見守りながら、考えていきたい。

（開発予定地に置かれたショベルカー）

■「焼け跡からの再生へ～ジュルンブンでの循環型農業～」（石崎）

5 月 8 日、イサムとジュルンブンへ向かった。昨年、西岡さんから大きな火事の報告があった場所だ。焼けた範囲は 50ha に及ぶという。一番はじめに発生したのは昨年の 3 月で、火事の原因は、誰かがある畑に火を放ったものが飛び火したらしい。ジュルンブンに着くと無残に焼け残り棒のように突き刺さった黒ずんだ木の残骸が無数に見え、その周りはすでに草が生え始めていた。ジュルンブンの一部は湿地だが、火事は離れた森の一部も燃やし、アグロフォレストリーを行なっている FNPF の土地の苗木、アブラヤシの一部までが燃えかすとなっていた。

ジュルンブンでは、新しく魚の養殖、養鶏、牛を飼いその糞を使ったコンポストを養分とした無農薬有機農業を始めている。ウータンが以前に支援したポンプは、魚のいけすに役立っているという。「牛が毎日草をたくさん食うけど、うまく太らない。胃に問題があるのではないか。薬が必要だろうか」

ここでは、これから有機農業に力を入れたいと思っている。有機農業の目的には、ある程度の自給型の暮らしを可能にする提案が含まれている。人々が集える屋根と椅子の付いたスペースがすでにできあがっている。シェルターも作りたい。

バスキは言う。「火事があったが、ジュルンブン周辺の森には、数匹のオランウータンが生息している。ジュルンブンは BGA のコンセッションエリアだが、村人の土地を含むため、パームにするのは難しいのではないか。6～7 月くらいにドライシーズンが来るかも。7～10 月が危険である。森があればオランウータンは生き残る。ジュルンブンは、子どもへの環境教育の場とする」

無残な火事のあとは見られたが、二次林として再生しそうな雰囲気は感じた。ジュルンブンの苗床は、32 種類もの原生種の苗が見事なまでに育てられていた。地道に苗を植えていけば、ジュルンブンは思ったより早く再生へ向かうかもしれない。アグロフォレストリーや有機農業を試し、そこで子どもたちや村人が交流できるスペースをつくり共に行うことで、その意義は伝えられるだろう。

上（火災の後と植えた苗）（人々が集える場）下（牛とコンポスト）（32 種類の苗床）

■植林とその後～パダン・スンビランでの農業（近藤）

5 月 6 日早朝、村の中を散歩中だった私はプリタ・スンビラン（パダン・スンビランを中心に苗作り、植林などに取り組んできた村人グループ）のおばちゃんたちの陽気な声に呼び止められた。いつもどおり早くからパダン・スンビランに出かけていくのかと思いきいや、今朝は村の奥にある森の中に苗を探しに行くとのこと。途中まで着いて行ったものの、道らしき道が見えなくなったところで、背丈よりも高い草が生い茂った林の中へと踏み込んで行くおっちゃん、おばちゃんたちの背中を見送った。1 時間後、たくさんの苗を手に森からでてきたプリタ・スンビランと FNPF スタッフたちは、一仕事を終えたあとのタバコをふかせながら小舟でパダン・スンビランへと出発。私も朝食を済ませて後を追った。

FNPF スタッフ・アドゥが操縦する小舟を降りて歩き始めた私の目に留まったのは、水を張った田んぼで作業をする人の姿だった。聞くと、パダン・スンビラン出身の家族・親戚が田植えをしようとしているところだった。昔はコミュニティ総出でしていた田植えも今では集まる人が少なくなったので、みんなでお金を出し合って田植え機を購入したとのこと。「本当は有機農業がしたかったんだけど、焼畑が禁止されてるから、肥料を使うしかないのよ。」という女性が見渡す水田の脇には、化学肥料の空き容器が転がっていた。ここでは、コメの他にウリ科の植物、ゴムの木、そして最近はアブラヤシも栽培し始めたそうだ。側の水路に溜まった、濁った水が気になる。

FNPF の小屋に着くやいなや、プリタ・スンビランのおばちゃんたちと大笑いしながらジョークを言い合うアドゥだが、スタッフという立場の彼には、おばちゃんたちの活動に関する不満を聞いて対応するという役割も回ってくる。苗の売り上げのメンバー内での配分や、牛の世話に関することなど。「グループには独立してほしいから、本来、こういうことはグループリーダーのユスランさんが面倒を見るべきだと思うけど、どうも難しいらしい・・・」

小屋に着いたのはちょうどお昼時で、森から出てきたおばちゃんたちが手際よく料理を始めた。買ってきたヌードルの他に、塩漬けの干し魚や小屋の裏で採れた野菜を調理した。「あそこで採ったのよ～」と指差す先を見ると、すくすく育った豆の木が。その隣には、以前にはなかった畝が作られ、新しい野菜の芽が顔を出していた。植林が一段落ついたパダン・スンビランでは、米や野菜などを自給するための動きが始まっているようだ。2014 年の年末にユスランさんと一緒に収穫した綿は、今では娘さんの枕となり、次の実が、収穫が楽しみなほど大きくなりつつある。

左：2014 年 8 月エコツアーで植えた木　　**右**：水田とアブラヤシ

■村の変化～村人が望む生活とその未来～（近藤）

今回、タンジュン･ハラパン村で、偶然にも隣組（町内会の次に小さい地域組織）の組長をしているジャイスさんの家に招かれて話を聞く機会があった。きっかけは、ワルンで雨宿りをしていた際に、彼の奥さんから「あんた、前にここで伝統的なコーヒーの作り方を色々聞いて、材料仕入れて作った子でしょ！そんなにコーヒー好きなら、うちで作ったのがおいしいから飲みにいらっしゃい」と声をかけられたこと。おしゃべりな奥さんと対照的に物静かな 40 代のおじさん・ジャイスさん。彼は 2000 年まで他の大多数の村人と同様、農業をしていたが、2000 年を機に農業をやめて違法伐採を仕事とし、2009 年から 2 年間は FNPF の植林に加わった。そして今は、村の近くに新しく開かれたアブラヤシ農園で週 6 日働いている。奥さんはこう言う。「昔は仕事のためにあっちこっち行って、長い間家を空けることもあったけど、今は仕事場が近いから毎日早く帰ってくるのよ。」

このような経歴や発言をする人のことを、開発「賛成派」と呼ぶのだろうか？FNPF スタッフ・ハドランとアドゥは、村人には「農園で働く以外の何か『楽な』選択肢を提示してあげないとだめだ」と言っていた。農園で働けるのは 50 才までだ。50 才になったとき、ジャイスさんの子どもたちは親を養っていけるような生活をしているだろうか？あるいは、「子どもたちのために」とおいてある土地を売らなければならなくなるのだろうか？プリタ・スンビランのメンバーは全員、50 才以上だそうだ。（あたかも、農園で働くことが選択肢にないことがグループに属している理由であるかのように 2 人は言っていた。）

村の中で農園に近い側のエリアでは、気のせいか朝の散歩で若い人の姿を見かけなくなった。そこに住む女性 2 人と雑談をしていたとき、「1 週間前から肌がかゆくなるようになった。」と聞いた。うち一人は、生後 2 ヶ月の赤ん坊を抱えて、「この子の体は川の水じゃなくて雨水で洗うの」と言っていた。他の女性が、「朝は村の小川に農園で掘り起こした土などが流れ込んでくるから汚くて水浴びしにくいし、しかも何か臭う」と言っていたことが思い出された。

ジャイスさんは、植林をしていた頃のことを誇らしげに語ってくれた。パダン・スンビランでは、自分たちが最初に植林を始めたのだと。ラマンダウでは、森が分断されている土地をつなぐように植林をしたことを、手で図を描きながら説明してくれた。もてなしてくれた自家製コーヒーには、家の裏で飼っている鶏の卵の黄身を入れたら元気が出るからと、嬉しそうに卵を持ってきてくれた。町で売っている工場に押し込められて育った鶏よりも、村で自由に走り回っている鶏の方が、肉も卵もおいしいと。奥さんも、「市販のコーヒーより手作りの方がおいしいに決まってるでしょ！」と自慢げだった。昔、その原料は家の側で取れた。今、村にはコーヒーの木は 1 本しか見つけられない。この先、鶏も植物も、家の裏で育てることができるだろうか？この人たちにはその未来が、どのように見えているのだろうか？

■バスキの想い（石崎）

前述したミーティングの日、クブ村のスルヤンさんが苗を買いに来て皆で運び込んだ。最近は苗の需要が多い。パームオイルのプランテーションが買うこともある。昔、会社に村人の苗を紹介したことから頼まれるようになった。RSPO や ISPO でのプレッシャーもあり、植林をしているらしい。1 年前に、巨大企業のアストラが村人から Rp.1300 万分の苗を買ったが、お金を払わなかった。土曜日に「日曜日まで待つが、払わなければ全ての新聞紙に言うぞ」といったら払った。その後、二度と連絡してこなかった。しかし、昨日久しぶりに「苗を売ってくれ」と来た。1 ヶ月前にジャカルタから誰かが電話をかけてきた。BGA の環境担当だった。オフィスに来たいというので「NO!」といった。苗が欲しいといってきた。「誰かが RSPO にコンプレインレターを書いたことは知っているか？」「知っている」「まだ問題は続いているので売ることはできない」といった・・

バスキによれば、森もオランウータンも（あるいはプランテーションも）知らないクマイの街の学校へガハルの木をあげるプランを近く実行するという。3〜5 個の苗を各生徒の家庭に配布し、植えてもらう。8 年ほど植えて小学校を終えた頃に売れば、まとまったお金が得られる。同時に、原生種や生態系についての重要性を学んでもらう。クマイにはたくさんの小学校があり、学校や親のコミュニティと一緒にやれば効果的だ。

読者の中には、バスキが消極的になっていると思われた方もいるかもしれない。決してそうではなく、これらの背景には、コミュニティ内の複雑な人間関係の中でボルネオの熱帯林を守る闘志を燃やしづらいということがある。そして、村をあげて森を守ろうとする人たちの話し、自分たちの労働環境を守ろうと 5 月 1 日のメーデーで声をあげたプランテーションワーカーの話しを次号でご紹介することができるだろう。

バスキは、スクールを作りたい。若い人が学び、各地へ飛び立っていくための・・問題はいたるところで起こっている。仲間が必要だ。それが何人であろうとも。ウータンでは引き続き、現場で活躍する人たちへの支援をしていきたいと思っている。

学習会企画

「見えない油　パーム油」って何？専門家に聞く会　報告　　（橋本友里恵）

日時：４月１８日（土）15:00~17:00(懇親会　18:30～)
場所：ケイゾク・エナジー(大阪市北区鶴野町４コープ野村梅田 A 棟 1310 号室)
講師：中西宣夫さん(ボルネオ保全トラスト・ジャパン(BCTJ) 理事)

ウータンメンバーのパーム油に関してもっと深く知ろうという目的で行われた今回の勉強会。毎年発行される「パーム油白書」の編集にも関わる BCTJ 理事の中西宣夫さんを講師に迎えて行いました。30 名以上の参加者が集まり、20 代、30 代の若い層の参加も多く、想定以上に関心が強いことが分かりました。質問時間には活発に意見が飛び交い、ボルネオ島の直面している問題を真剣に考える場となっていました。来場者アンケートの結果からもパーム油への理解が深まったこと、RSPO について、日本国内でできることなどに興味を持たれた方も多く、今後のウータンの勉強会等で、テーマとして取り挙げていきたいですね。次回の学習会は 7/12(日)@梅田の予定です。

<u>内容</u>

・世界の主要油脂生産量(2013)は 1 位パーム油(56 億ｔ30%)、2 位大豆油(43 億ｔ22%)、3 位菜種油(25 億ｔ13%)である。パーム油の生産量うち 50%がインドネシア、34%がマレーシアで生産されている。
・アブラヤシの果実の果皮部分から「パーム油」、胚乳部分から「パーム核油」の 2 種類の油が生成される。大豆や菜種よりも含油率が高く、農地面積当たりの油脂生産量も高い(大豆の 10 倍以上)ため、非常に効率が良い。
・アブラヤシの原産はアフリカ、一年中高温の地帯に生息。定植後 3 年目から収穫し、収量の落ちる 30 年頃に更新する。作業機械化が難しく、ほとんどの作業が人の手で行われている。
・パーム油は日本の常温(15℃)では固まるため、市販ではあまり販売されていない。主に石鹸、洗剤、マーガリン、チョコレートなど加工品として流通している。
・ヤシ油(ココナッツ由来)とパーム油(アブラヤシ由来)は異なる油である。

<u>参加者アンケートより</u>

・面白かった。まず身近なことも知らないことが多いと思った。解決（改善）方法について、システム化など、考えさせられること多しです。
・見えない油という点について詳しく知りたい。どう対応すればよいか。
・まだ学生ですが、周りの人にボルネオの現状を伝えていきたい。
・人口が増えていく中でどう調整をとっていくか、難しい問題。
・パーム油の製造過程、どのように製品に使われているかを次回は是非聞いてみたい。
・この１月に修学旅行でボルネオ島に行き、来年も行く予定なので、事前・事後学習の参考になればと参加した。教育で消費者の意識を高めることが時間はかかるが必要だと思う。

西カリマンタンから② グヌン･パルン国立公園も違法伐採停止！

西岡良夫

2007 年まで西カリマンタンのケタパン地区では違法伐採が繰り広げられ、アラス･クスマ･グループの T ウォン容疑者を含め、4名が違法伐採容疑で警察に取り調べられた。汚職の罪に直面する彼は、植林資金と公金横領容疑というものであり、その容疑は金額が 4.8 億ルピアに相当するものだという(『Tempo』より)。

2006 年に私たちウータンと Telapak(テラパック)と合同調査で調査したら、PT. Suka Jaya Makumur(スカジャヤ･マクムール社～アラス･クスマ･グループ)や村の住民がグヌン･パルン国立公園で違法伐採し、同公園からもラミン、ウリン、セランガンバツ等の木材を運び出して密輸していた。大半の木材がマレーシア･サラワク州へ運ばれていた。

調査に行ったら、当時「あいつら、何者だ。我々の仕事の邪魔をしに来たのか」と、グヌン･パルンの入口の町･トロク･メロノで話されていた。しかも森林警察の一部の警官がグルになっていたので、Telapak と「違法伐採に手を貸すな」とケタパン森林警察の本署の所長に違法伐採を停止させるよう強く申し入れた。

下図でわかるように、グヌン･パルン国立公園の Peat forest(泥炭地の森林)、Lowland forest(低地の森林)部分は、濃黒の Cleared land(皆伐地)に大半が変化した。ランドサットからの情報である。違法伐採に次ぐ違法伐採が繰り広げられていたから。その頃、テングザルを数頭みたが、オランウータンは個体数が多いと記されていたが遭遇出来ず、巣1つだけだったから、どのくらい破壊が進んだのかが今回の調査目的の1つだった。

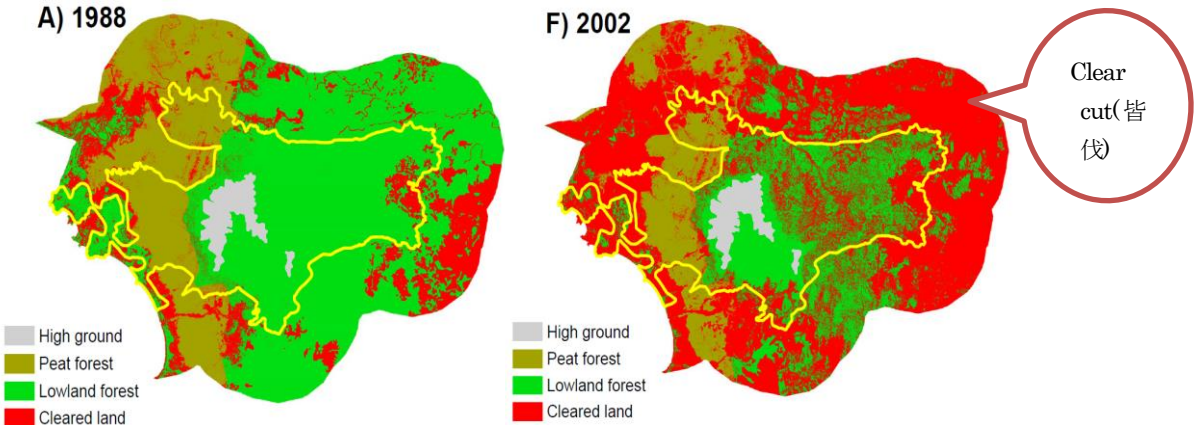


Fig.S1.Cumulative forest loss within the Gunung Palung National Park(GPNP)– Forest/non-forest classifications are based on a Landsat TM time-series: A)1988 F)2002＊現在は破壊がもっと進行し、中央部の南(図下)側のみが保全。

(2006 年/グヌン・パルン国立公園の違法伐採 /右・テングザル)

2012 年 4 月 12 日のニュース okzone.com(*)によると、「T・ウォン容疑者は、ケタパンでの違法伐採・違法材取引について、司法も協力者になってほしいと依頼した。2008 年、トニーは当局に恨みをかって投獄された。ケタパン地裁は、最高裁の同様なケースからして 4 年の懲役刑を課そうとしたが、報告書の多くには間違いがある。彼は地域住民に経済的な利益をもたらしている」と、彼の弁護士アリプルナ・マロティは弁護した。

同年 6 月、条件付きでトニーを免罪し、多額の金を払ったという(okzone.com より)。これで良いのか・・・？

確かにトロク・メロノ等の住民にとっては違法伐採・違法材貿易は、経済的に潤う甘い蜜だ。しかし、国立公園の保護地区でのただ同然の違法操業であり、一番儲けていたのは、伐採企業なのだ。

ケタパン地域は、西カリマンタンで最大の面積がある所だが、地域の人口は 10%に満たない。森林被覆率は 2013 年までに 21.55%しかなく、森林伐採権は地域の政治家の利益のために濫用されている(*)。

(*資料) www.insideindonesia.org/feature-editions/deforestation-rent-seeking-and-loan-election-in-west-kalimantan より

危険なトロク・メロノ町でグヌン・パルン公園内に行きたいので町の人と船のチャーターの交渉をするが、彼らは「2013 年末に、PT.SJM(PT. Suka Jaya Makumur/以降 SJM と略)社はもう伐採してないよ。意味ないよ」と、全く信じられない言葉を言う。何故だ・・？それも複数の住民からだ。昔なら全くノー・コメントだったが・・・。「本当かどうかも知るためにも、船をチャーターして行こう。信じられない」と、私は同行して共同調査のオランウータン保護センター(COP)のパウリヌスに告げる。彼はこの地区は初めてだから。

2014 年 10 月 1 日、トロク・メロノ町から木材の大集積地の Matang(マタン)へスピードボートで進む。

「違法材らしい木材も見られないなあ。どうしたのかな？やっぱり PT.SJM は操業を止めたのかなあ」とパウリヌスが言う。かなりトロク・メロノからスピードボートで公園内に来たが、密輸の船も無く、木材のかけらが 2 つ浮いていただけだった。全く木材が見られない。

「どうも違法伐採停止は、本当らしい。ここまできて 1 隻の船も見ないから。2013 年 2 月の Mongabay.com の News にはグヌン・パルンでまだ違法伐採していたというから、最終的な判断はまだかなあ」と私が伝えた。

あちこちの公園内が伐採された跡が残るまま、スピードボートは更に加速して奥へ行く。

マタンの木材積出港の手前の森林警察事務所に船を留める。聞けば森林警察はいないと。やはり停止だ。グヌン・パルン国立公園の状況を確認するため、COP のパウリヌスは空撮用小型ヘリコプターを飛ばした。ヘリはいつものように東西南北へと飛ぶ。しかしだ、、突然小型ヘリは変な落下になって、3 分ぐらいで落下し地面に叩つけられた・・。パウリヌスも私も空撮用ヘリが落ちた水溜りの所へと急ぐ。

「何故だ・・・??」とパウリヌスが叫ぶ。面白そうに見ていた村の子どもたちも落ちたヘリに向かって走る。

「アーッ、カメラが壊れている。」分解してみたらバッテリーは残っていたのに落下した。原因は不明だ。川か、国立公園内の違う所に落ちたら、ヘリを全く救出できなかっただろう。「No Problem。問題はあるがまだマシだ。最悪でないから」と、2 人とも気を落ち着かせ慰める。カメラと本体一部が破損していた。

空撮ヘリが落下した所から木材積出用に使用していたバージ船が見える。「今はアブラヤシ用積出のバージ船として使われている」と船の運転手が言う。確かにここも木材が見られない。やはり伐採は停止したのだ！

（上左・グヌン・パルン国立公園を行く/中・木材積出バージ船がアブラヤシ用に/右・木材無の Matang 積出場）
（下左・Matang の廃屋./右・違法伐採された箇所の跡/ 2014 Oct.1 撮影 by Nishioka）

（左・木材倉庫は空だ/中・空撮用ヘリ落下も違法伐採停止にパウリヌス喜ぶ/右・GP の着生植物/2014 Oct.1）

マタン村の元 PT.SJM の積出場には、なんと 15 本の木しか見られない。クレーン、重機もない。完全停止だ。詳しく聞けば、「昨年末 PT.SJM 社は全てのグヌン・パルン国立公園エリアで伐採を中止」と村人が言う。

2005 年、インドネシア大統領令第 4 号で違法伐採をなくすよう発令していた。だが違法伐採は続いていた。

発令内容とは、1）インドネシアの全ての地域で違法伐採の撲滅を加速させる、2）それを実施するため、不正な事項に関与する政府・地方政府の職員に対して制裁を課す、3）根絶の実行にむけて監視を協力する、4）違法材と汚職・マネーロンダリングの活動に国民からの情報を共有する、5)証拠がそろうと制裁へ実施する、という事だ。だが、2014 年に東カリマンタンのクタイ国立公園で、違法伐採がされるという News を得ていた。

以前 2002 年グヌン・パルン国立公園内で 200 箇所の製材所があった。だが 2014 年に違法伐採が完全停止したが、今度はその地でアブラヤシ開発に転換が始まっている。伐採も酷く、オランウータン等の多くの生物の住処がなくなった。このグヌン・パルンはどのように回復出来るのだろうか？とりあえず違法伐採停止だ。

やったあ!今回オランウータンは巣のみしか確認できなかったが、、。 （2014 年、4 箇所の報告は終/西岡）

連載「オランウータンの生態と保全」

第４回　絶滅の危機に瀕するオランウータン

久世濃子（国立科学博物館・人類研究部）

今回は、オランウータンを絶滅の危機に追いやっている要因について、お話しようと思います。オランウータンは現在、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリスト（世界の絶滅のおそれのある生物種のリスト）で、絶滅の危機が最もさしせまった絶滅危惧ＩＡ類（スマトラ・オランウータン）、およびこれに次ぐ絶滅危惧ＩＢ類（ボルネオ・オランウータン）とされています（2012 年時点）。今までの連載でお話してきたように、オランウータンは成長に時間がかかり（初産年齢は平均 15 歳）、繁殖のスピードが陸棲哺乳類の中では最も遅い（6～9 年に 1 回、1 頭の子しか出産しない）ので、一度生息数が減ってしまうと、回復させるのは至難のわざです。

オランウータンを絶滅の危機に追いやっている要因は、現在、影響が大きい順に（1）開発（主にオイルパーム農園にする為の森林皆伐）による森林面積の減少、（2）密猟、（3）（木材生産の為の）森林伐採、（4）森林火災による生息環境の劣化です。（1）と（4）に関しては、今までも多くの事例がこの会報でも報告されていますので、今回は主に（2）と（3）についてお話したいと思います。前述のように、オランウータンは非常に繁殖スピードが遅い為、狩猟圧が年間1％であっても、その地域から絶滅すると言われています。1960 年代以降、地元政府（マレーシア、インドネシア）はオランウータンを保護動物に指定し、狩猟を禁止していますが、密猟の監視体制が十分でないこともあり、法が守られているとは言いがたい状況です。例えば「カリマンタンでは年間 750～1800 頭のオランウータンが殺されている」という報告もあります（Meijaard et al. 2011、日本語解説記事：http://nouko.at.webry.info/201201/article_6.html）。

20 世紀になってからは、ペット目的の密猟も、オランウータンを絶滅においやる一因になっています。オランウータンのコドモ（写真 1）は愛らしく、ペットとして人気が高いと言われています（日本でも 1999 年に大阪のペットショップでオランウータンのコドモが売られていた事件がありました；Osaka4）。また近年、特に問題になっているのは、「農業害獣」としてオランウータンが殺される事例です。森林伐採や農地開発により、生息地が縮小・分断されたオランウータンが、食べ物を求めて、果樹園やオイルパーム農園に入り込んだところを、作物への被害を防ごうとする農園の労働者達に殺されることがあります（詳しくは前回お送りした、ヤヤさんのレポートを参照して下さい）。

1960 年代後半～1980 年代には、ボルネオ島の熱帯雨林では大量の樹木が伐採され、大部分が日本に輸出されていました。大規模な森林伐採により、生息地が破壊され、伐採作業に巻き込まれてオランウータンが死亡したり、密猟されました。図 2 に、「セピロク・オランウータン・リハビリテーションセンター（以

下セピロク）」というボルネオ島サバ州にある保護施設が受け入れたオランウータンの個体数を示します。ほとんどが母親を殺された孤児（コドモ）です。図 2 には、保護されたオランウータンの個体数とあわせて、サバ州の木材生産量およびオイルパーム農園の面積を示しています。1970 年代～1980 年代の森林伐採が盛んに行われていた時期に、保護されたオランウータンの個体数が増える一方で、木材生産量が激減した 1990 年代以降も、保護された個体数はさらに増加しています。この時は、オイルパーム農園の面積が急増している時期にあたります。2000 年代に入ると、受入個体数は 10 頭未満/年と 1960 年代と同程度まで減少しています。これは、ほとんどの生息地がオイルパーム農園に転換され、母体である野生個体群が激減してしまったことのあらわれでしょう。私は 2001 年～2004 年まで研究の為にセピロクに通っていましたが、保護される個体の数が少ないこともあり、実際にオランウータンが保護される現場をみることはありませんでした。

1980 年代頃までは、オランウータンは原生林（伐採等、人間活動の影響を受けていない森林）でしか生息できないと考えられていましたが、1990 年代以降、伐採後の二次林にもオランウータンが生息している、という報告がされるようになりました。一次林と二次林でオランウータンの生態を比較した研究もいくつか行われていて、二次林の方が一次林に比べて食物環境が悪く、生息密度も低い、という報告（Felton et al. 2010)がある一方で、アカシア植林地も利用するなど、生息環境の変化に応じて柔軟に採食行動を変化させることも報告されています(Meijaard et al. 2010)。一方で、森林へのダメージを最小限に抑えるような低インパクト伐採を行うのであれば、オランウータンの生存と森林経営の両立は可能、という報告もあります(松林尚志「熱帯アジア動物記」2009)。

最近の研究では、オイルパーム農園開発と地球温暖化による気候変動の影響を考慮すると、2080 年には、オランウータンの生息地の 73%が失われ、中央及び東カリマンタンの生息地はほぼ消滅する、という報告もあります（http://dx.doi.org/10.1111/gcb.12814）。

※欄外の脚注

ウータン・森の通信１１６号に同封した小冊子「アブラヤシ農園のオランウータン」は、日本インドネシア NGO ネットワーク（JANNI）が発行したものでしたが、了承を得ずに配布してしまいました。著者であるヤヤ・ラヤディンさんから久世が直接提供いただいた資料でしたが、日本語に翻訳する過程についての確認を怠ってしまいました。JANNI やウータンの関係者の皆さんには多大なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありません。

図 1　セピロクで保護されたオランウータンのコドモ

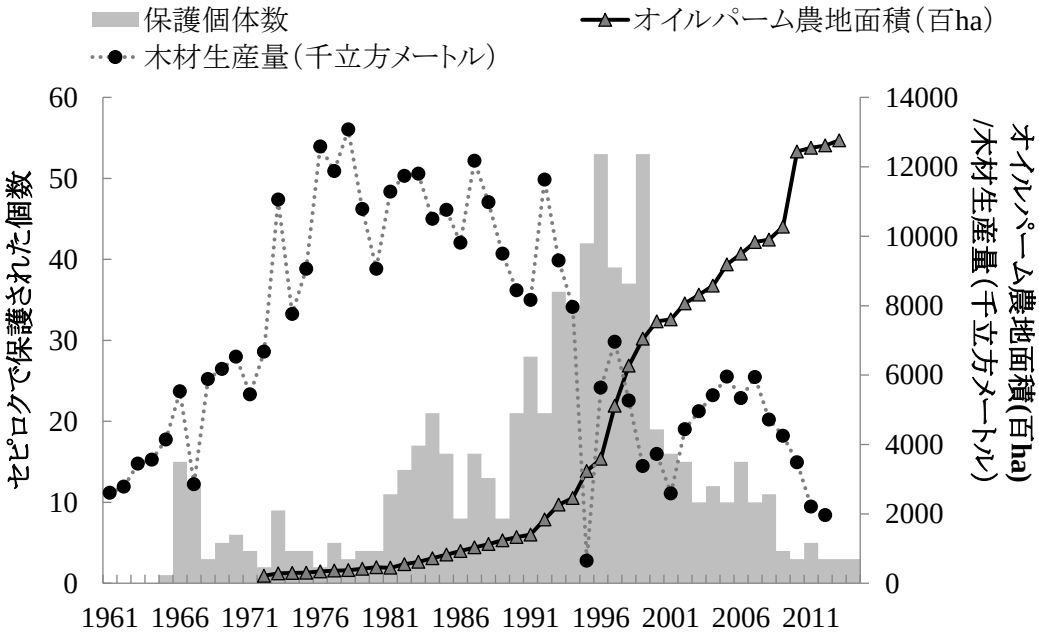


図 2　保護されたオランウータンの個体数とあわせて、サバ州の木材生産量
およびオイルパーム農園の面積
（Kuze et al.　準備中）

リニア学習会 in 大阪（樫田秀樹氏を招いて）の報告

春日直樹

4 月 25 日にウータンにとてもかかわりの深い樫田秀樹さんを招いてリニア中央新幹線についての勉強会をしました。 会場の弁天町生涯学習センターの講堂は 100 人の参加者で埋まりました。

サラワクなどの熱帯林の問題にも取り組んでこられた樫田さんの紹介は、旧知のウータンの西岡代表にお願いしました。樫田さんご自身の豊富な取材に基づくリニア新幹線についてのお話に、参加者は真剣なまなざしで聞き入っていました。 参加者は深刻な自然環境破壊・社会環境問題に改めてびっくりした様です。

以下が樫田さんのお話の内容です。

ほとんど報道されていないのですが、リニア沿線住民は反対の声を上げています。南アルプスに 20 キロになるトンネルを掘削し、そこをリニアが走行するのです。リニアは無人走行で運転手がいません。中央指令室からの遠隔操作です。トンネル内でトラブルが発生した時は「乗客が助け合って避難する」と JR 東海は説明するのですが、 一編成 1000 人の乗客が想定されており、どの様に非常口に乗客を誘導し避難を安全に行うのでしょうか。リニアに乗り合わせた子供や老人や病人が無事非常口から脱出可能なのか、疑問が残ります。 地下深くの事故現場となればパニックに成り大混乱が想定されます。

掘削残土の処分も問題があります。トンネル掘削で地下水脈の分断が起き、異常渇水や出水騒ぎが起きています。生活用水が枯れてしまい申し訳程度の補償金で我慢をさせられている事例もありました。また岐阜県東濃地区は日本最大のウラン鉱が存在しているのです。掘削中にウランが見つかった場合どのようにするのでしょう。 次から次へとリニア工事に関わる懸念材料がありながら、国民に知らされないまま、工事を始められようとしています。

また、ＪＲ東海という会社の問題として、大阪の鳥飼新幹線基地の地下水利用で摂津市との間で訴訟が起きています。

以上、樫田さんのお話しのほんの一部ですが、リニア新幹線には知られていない大変な問題があることを感じていただけると思います。くわしくは、樫田さんの書かれた「悪夢の超特急　リニア中央新幹線」（旬報社）を読んでいただきたいと思います。これからも、リニアの問題での学習会を続けていきたいと思っていますので、ウータンの皆様にもご参加、ご協力をお願いいたします。

なお、リニア新幹線の学習会は次回、**8 月 1 日（土）**の 14:00～16:30 まで、奈良県文化会館で行います。講師は甲府市議会議員の山田厚さんで、**「自治体から見たリニア新幹線中間駅の問題～甲府市リニア新駅の事例」**というテーマで話していただきます。資料代は 500 円で、参加申し込みが必要です。申し込み先は以下の通り。

電話(0798―22－4190)。FAX(0798―22－4196)。ﾒｰﾙ（contact@kumamori.org）

問い合わせは春日迄（090-5640-0396）

世界の森林ニュース World Forests News

2015年2－5月

By Nishioka

【WWF、2050 年までの森林破壊予測 2 億 ha】

4 月 29 日の WWF 報告の「Living Forests Report: Saving Forests at Risk」は、森林減少が起きている最前線 11 ヵ所の 2010～2030 年までの状況を検証。注目対象の 11 ヵ所の内、10 ヵ所が熱帯に位置する。今後対策がないと 2050 年までに 2 億 3000 万 ha の森林が消失と分析。[WWF]

【GFW,2011-13 年森林破壊報告、Amazon は?】

Global Forest Watch がメリーランド大学とで作成されたデータを発表。2013 年に 1800 万 ha の森林が消失。特にロシア、カナダの森林火災で、2011～2013 年の間の森林減少の 34%が北方林の減少による。年約 680 万 ha が減少。森林減少率は世界的に高いが、ブラジル、インドネシアは、破壊の速度が緩くなる。しかし、ブラジル政府はアマゾンに 400 のダムを建設予定し、インデイオたちが反対活動を広げている。Global Greenhouse Warming は、アマゾンの森林破壊が気候変動も世界に及ぼす。最大の Key と。[資料：GFW4・29/、Amazon Watch5/9、西岡の blog 等]

【IUCN、農園開発等が絶滅危惧種拡大と報告】

IUCN(世界自然保護連合)の「No Net Loss and Net PositiveImpact:Approaches for Biodiversity」での報告では、採鉱やインフラ開発業界で使用の方向を適用で、農園開発、林業がグローバルな生物多様性の喪失軽減の可能性があると。IUCN の絶滅危惧種の「レッドリスト」によると、絶滅のおそれのある種への影響の数が、インフラ開発で 4688 種、採鉱セクターが 1692 種だが、農園開発は 8482 種、林業は 7953 種にも影響を及ぼすと。[IUCN4/16]

【EU 木材法、問題点-検証がなく検証必要】

2015 年 3 月で EU 木材法 (EUTR)が施行されて 2 年が経過だが、現時点の段階で木材輸出国への影響についてのデータがない。木材の取引量は、合板などは過去 2 年間で減少は少しと Fordaq の報告。英国では中国から合板輸入業者のシステムは不十分といわれる。[資料 clientearth.org 他]

【GCP「Forest 500」ランキングで目標達成不可】

グローバル・キャノピー・プログラムのランキングは政府、企業、投資家が森林破壊を取り除くための評価を報告。調査結果は、包括的な政策を持っている企業は数社のみ。このままでは、2020 年までに「ゼロ・ディフォレステーション（森林破壊をなくす）」という目標を達成することはできないと。最悪点はダノングループ（仏）、花王、P＆G(USA)、ネスレ（スイス）、Reckitt Benckiser（英国）、ユニリーバ(英国)、HSBC（英国）の 7 社。［GCP2/23］

【世界一年金基金、森林破壊の企業へ融資停止】

Good ニュース! ノルウェー政府年金基金は、熱帯での森林減少に関与の企業へ投資を回避することを適用！森林破壊は責任ある企業活動として許されないという強い警鐘を鳴らすものだ。レインフォレスト・ファウンデーション・ノルウェーがノルウェー政府基金のアニュアル・レポートを分析すると、まだ 197 億ドルを森林破壊に関連の事業に投資と。企業に事業と気候変動リスクの関係の情報開示を求め、ノルウェーは企業に対し、森林減少を軽減し、森林を保全と業界の森林の持続可能な管理についてサプライチェーンを監視し、熱帯林の情報開示を実施する戦略を持つと。[mongabay.com 4/21]

【BankTrack2014 年年次報告で 2 社が融資停止】

2014 年の報告書を発表。SantAnder と ABN Amro という金融機関がインドネシアの APRIL 社へ融資停止など 2015 年に大進歩! [フエアウッド News]

【インドネシア NGOs、大統領へ森林保全要請】

インドネシアの温室効果ガス排出は、世界の第 5番目となり、森林伐採と土地利用変化でその約 80 %が起因。アブラヤシ開発が最大の原因。インドネシアの指導者は「森林モラトリアム」で、森林一部を保護で排出量を制限する機会を持つが、進まず。ForestTrend は天然林の 30%を破壊と指摘。同国 NGOs が強く申し入れる。[Gardian5/8、Strait Times5/12、Forest Trend 等]

京都新聞の５月２２日の朝刊にウータンの石崎事務局長のボルネオ島の現場報告会の記事が掲載され、後日、毎日新聞にも掲載されました。

オランウータンの森守ろう

破壊進むボルネオ島の熱帯林

消費活動から考える 24日東山で

プランテーション開発のために伐採されたボルネオ島の森。土壌には二酸化炭素を多量に含む特性もあり、石崎さんは開発の過程で多量のCO_2が排出されることも懸念する（石崎さん提供）

東南アジアのボルネオ島で続く熱帯林破壊の現状を伝える学習会「熱帯林破壊の現場からの報告～私たちの暮らしとのつながりの視点から」が24日午後12時半から、京都市東山区の「東山いきいき市民活動センター」で開かれる。

大阪のNGO「ウータン・森と生活を考える会」の石崎雄一郎事務局長が報告する。ボルネオ島では「パーム油」の原料となるアブラヤシを栽培するプランテーションの開発が進み、絶滅危惧種のオランウータンや、テングザルなどボルネオ島独自の動物を含む豊かな生態系を育んできた熱帯林が危機的な状況にあるという。

大豆油や菜種油などと同じ植物油の一つであるパーム油は価格が安く多用途であるため需要が多い。特に米国では2006年にトランス脂肪酸の含有量表示が義務化されたことでトランス脂肪酸の含有量が少ないパーム油の需要が急増、現在パーム油は植物油生産量の中で最多となっている。日本の輸入量も年々増え、ポテトチップスやアイスクリーム、マーガリンなどの食品や洗剤、化粧品といった日用品の多くに使われている。

インドネシアとマレーシアで世界の生産量の8割以上を占め、昨年末と今年のゴールデンウイークにボルネオ島を訪れた石崎さんによると、今も熱帯林が次々と伐採され新たなプランテーションが生まれているという。

熱帯林が縮小した結果、オランウータンやゾウなど森で生活する動物の行き場がなくなりプランテーションに迷い込んで殺処分されるケースも発生、石崎さんは「生物多様性が急速に失われている状況が、私たちの消費活動に関わりがあることを知ってほしい」と話している。

学習会の申し込みは主催者のNPO法人「環境市民」☎075（211）3521。参加費千円。定員は20人。

（太田敦子）

京都新聞の記事

「消費生活 環境問題に直結」

東山でNPOが講演会

熱帯林とオランウータンの現状学ぶ

参加者にクイズを出題しながら、画像で熱帯林の減少を説明する石崎事務局長＝東山区で

京都を拠点に世界規模の環境問題に取り組むNPO法人「環境市民」主催の、インドネシアの熱帯林とそこに生息するオランウータンについて学ぶ講演会が24日、京都市東山区の東山いきいき市民活動センターであった。

現地で活動する環境団体が、熱帯林減少と絶滅危機に直面するオランウータンの現状との関連性について報告した。

環境市民は1992年の発足以来、地球温暖化問題などに取り組み、97年に京都市で開かれた国連気候変動枠組み条約第3回締約国会議（COP3）にも積極的に関わった。

講演した「ウータン・森と生活を考える会」の石崎雄一郎事務局長は、パーム油採取用のヤシ園整備でオランウータンが生活する森林が年々減少していると指摘。日本人も年間一人当たり約4キロのパーム油を消費していると紹介し、「我々の消費生活が気付かないうちに環境問題につながっている」と訴えた。

【鈴木理之】

毎日新聞の記事

今年もボルネオエコツアーを実施します。

８月２０日（木）～２７日（木）の予定。くわしいことはお問い合わせください。

問い合わせ先：**石崎**（issy@pure.ocn.ne.jp　090-8145-1146）

会計より

井下祥子

＜会費・カンパをありがとうございます！＞　　2015.5.19まで

いつもウータンをご支援いただき、本当にありがとうございます。いただいた会費・カンパを活かして環境を守れるよう、これからもがんばります！

☆振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。領収書がご入用の方、また氏名の記載を望まれない方も、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。

学習会のお知らせ

＊ウータン第２回学習会

７月１２日(日) 午後２時から4時

講師：事務局長・石崎雄一郎

「Ｈ村のアブラヤシ開発の問題」

場所：ケイゾクエナジー（大阪市北区鶴野町４コープ野村梅田の 13 階 1310 号室）

参加費：500 円（予定）

申し込みが必要です。問い合わせ先：石崎（issy@pure.ocn.ne.jp　090-8145-1146）

コープ野村梅田

[おしらせとおわび]

ウータン・森の通信１１６号に同封した小冊子「アブラヤシ農園のオランウータン」を、行き違いにより、発行元の日本インドネシア NGO ネットワーク（JANNI）の了解を得ないままに印刷・配布してしまいました。深く反省し、関係者の方に深くお詫び申し上げます。

ウータン・森と生活を考える会

インドネシアの森林破壊を問う！合法材を使おうよ！

ゲスト講演：アルビ・バレンティノス氏（Telapak/FLEGT Asia）

◆日時：６月１３日（土）

１８時３０分～２０時３０分

◆場所：ひとまち交流館・京都

（京阪線清水五条駅から徒歩７分）

◆資料代：１，０００円

（ひとまち交流館京都ホームページより）

アルビ・バレンティノスさんとは

違法材ラミンを調査し、国際 NGO の EIA と共に違法伐採問題 を国際的に提起する。アルビ氏やヤヤット氏、ハプソロ氏の働きで、我がウータンも違法材停止のキャンペーンを大々的に実施した。合法材使用をと訴える。久々の日本での講演です。ご参加を！

同じ日に以下の催しもあります。

*6月１３日P2-5時、関西スタディ・ツアー説明会/キャンパスプラザ京都

また、好評のアブラヤシについての学習会第2弾もおこないます。

＊ウータン第２回学習会・7/12(日)P2－4時/講師:事務局長・石崎雄一郎

「H村のアブラヤシ開発の問題」　場所:ケイゾクエナジー　(p19もご覧ください)

問い合わせは、石崎（issy@pure.ocn.ne.jp　090-8145-1146）

西岡（hutan.nishioka@docomo.ne.jp）まで

ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561
http://www.hutang.jimdo.com

【一部】300円【年会費】4000円
【郵便振替】00930-4-3880

◉購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
◉ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER